

Japan Chapter GOVERNOR'S NEWSLETTER



ACP
AMERICAN COLLEGE OF PHYSICIANS
INTERNAL MEDICINE | Doctors for Adults

Spring 2006

Kiyoshi Kurokawa, MD, MACP
Governor, Japan Chapter

支部長からのメッセージ

Governor 黒川 清



American College of Physicians (ACP) Japan Chapter が開設されて 3 年が経過した。本年 4 月 15 日(土)には日本内科学会のご協力を得て、パシフィコ横浜で第 3 回総会・講演会を開催することができた。会員も3年間で 617 名に増えた。嬉しいことである。この方たちがこれからの内科診療のお手本になり、診療の場で、研修の場で、あるいは教育の場で活動を広げてもらいたい。

医師の卒後臨床研修や生涯教育の変革、また職業人としての社会的責任の重要性の認識については日本だけでなく世界的な流れになっている。Professionalism への意識改革とも言える。日常の自己改革への意識変化が大切なのである。

この講演会に先立って米国の Philadelphia で開催された ACP 年次講演会には、私が学会会議の会議と重なったために結果として例年のこととなったが上野文昭副支部長に支部長会議に出席していただいた。また、渡辺毅理事には Convocation Ceremony(FACP 授与式)に出席していただいた。多くの日本支部からの参加者を得て、ACP でも日本支部への連携の意識が高まっている。ACP から役員の先生方が来日されるときには、お会いして情報交換を行っている。

今年の総会・講演会には、一週間前まで ACP の President だった Dr. C. Anderson Hedberg がご夫人と共に参加されたが、多くの会員やパネリスト、さらに来日中の Dr. Ellen Cosgrove も参加されて大変意義のある会となった。Gremillion 先生の症例提示・検討「一目瞭然 Ichimoku Ryozen」はいつもながらの見事なもので、楽しいものであった。優れた臨床教育者の腕前と人を惹きつけるお人柄にいつも感心させられる。Gremillion 先生をよいお手本として、会員一人ひとりが臨床の現場で創意工夫しながら持てる力を活かしてほしい。

ACP 前会長の Hedberg 先生は Chicago Symphony Orchestra の随員医師であって、日本公演の際に何回か日本へ同行して来られたことがレセプションで紹介された。また先生は、地元 Chicago White Sox が去年の World Series の Champion になった際に、井口選手の活躍がその Champion 獲得に貢献したことにも触れておられた。

一人ひとりの会員、特に新しい会員、そして新しい Fellow が毎年1-2人の新会員をお誘いし、Annals や ACP Journal Club を普及させていただきたい。また、多くの会員が「ACP Website」にアクセスして意見を交換し、種々の支部の活動にも積極的に参加して日本支部を発展させてもらいたい。どうぞ遠慮なく事務局にお問い合わせください。あなたたちの日本支部なのです。

ACP 日本支部第 3 回総会・講演会報告

理事 木野昌也

第 103 回日本内科学会総会の第2日目、パシフィコ横浜カンファレンスセンター会議室の会場を埋めた 300 名の聴衆の熱気の中で、ACP 日本支部第3回総会・講演会の幕が切って落とされた。講演会の今回のテーマは「終末期における延命治療」であるが、終末期患者の呼吸器外しが大きく報道された直後の開催でもあり、Room 301/302 を開放した会場には、全国から駆け付けた医学生や研修医、ベテランの医師まで幅広い聴衆を集め、今回のテーマについての関心の高さが窺われた。



黒川清先生

Dr. C. Anderson Hedberg

まず ACP 日本支部の Governor に再任された黒川清先生のいつもの情熱溢れる開会の挨拶から始まった。会員数はこの1年で 492 名から 617 名と増えており、会員数の多さと着実な成長は米国本部でも注目を集めていること、ACP の goal は情報の提供と共有であり、会員の積極的な参加と活発な活動を求められた。ついで、ACP 前会長である C.A. Hedberg 先生から、ACP を代表して参加者に対する歓迎の挨拶があった。本年度3度目となる日本支部総会であるが、毎回、ACP 会長を務められた先生から直接、米国の医療事情、特に ACP の活動についてお話を伺うことができる大変貴重な会である。この総会と講演会はグローバルな視点で医療活動を志す全ての医師たちにとって、参加が欠かせない会となることであろう。

いよいよ今回のメインテーマである「終末期における延命治療」が小林祥泰 Scientific Program Committee 委員長と武田裕子委員の司会で始まった。終末期医療における我が国の現状は混乱の極みにある。最近の富山県射水市の事例のように、我が国では、未だ医師、患者、家族、一般社会、マスメディア、法曹界、政界、それらの間に終末期医療の在り方についての考え方が醸成されていない。



小林祥泰先生

武田裕子先生

Hedberg 先生は、基調講演「米国における事前指示書 (Advance Directive、以下 AD) と DNR」で、米国の終末期医療に対する考え方を明確に提示された。やや長くなるが以下に簡単に紹介したい。AD とは、将来重篤な状態になり自らの意思を表示できない場合を想定して、あらかじめ治療に関わる指示を表明しておく書類である。Hedberg 先生は、AD の基礎にある二つの規準、すなわち倫理的規準と法的規準について解説された。倫理的な規準とは、あくまで患者自身の自主性を尊重し、自らの運命は自らの意思で決定すべきであるとする考えである。法的規準とは、1975 年の Karen Ann Quinlan、1990 年の Nancy Cruzan の事例、特に 2005 年の Terri Schiavo の事例は、日本でも連日大きく取り上げられ、われわれにも記憶に新しいところであるが、これら一連の判例に基づいた考え方である。すなわち患者の意思は、患者の能力が正常である間に、立会人の元で明確に書類に記録されていなければならないとするのが法廷の考え方である。従って、終末期に自らの意思を表示できなくなった際に生命延長を望まないとする意思が明確であれば、生命維持に関わる処置を中止することができるとされている。AD を実践するには、具体的には二つの方法がある。Living Will と Durable Power of Attorney for Health Care である。Living Will とは、末期状態になった際には延命治療をすることなく、尊厳死を希望する旨を文書で表明する方法である。Durable Power とは、自らの意思を表明できなくなった際、医療に関する重大な決断を一任する代理人 (弁護士) を、あらかじめ指名しておく方法である。これらの文書は、作成の際には必ず立会人のもとで署名されなければならない。医療機関は患者の入院時に AD を配布することが、既に 1990 年の米国連邦法に定められているということである。ところが、これだけ進んだ米国においても、AD を実際に作成する人は米国人の 25% にすぎない。Do Not Resuscitate (DNR; 蘇生処置をしない) は、患者の同意により作成された AD の一つの形であるが、患者が絶望的な末期状態にある場合、多くは無駄な心肺蘇生術を望まない家族の同意で作成されているのが現状である。



Dr. Hedberg

白浜雅司先生

NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長辻本好子さんの、医師と患者のより良い関係を作るための様々な取り組みの紹介の後、自ら過疎地でのプライマリーケアを実践しながら、生命倫理の分野で势力的に活動しておられる白浜雅司先生の基調講演があったが、正に圧巻であった。個人主義を前提とする欧米社会と家族

主義や集団主義を大切にしている相互依存的な日本の社会との違いを指摘しながら、現在我が国では延命治療の実施や中止に関する明確なガイドラインはなく、終末期医療に悩みや疑問を感じる医師は86%、ナースは91%に上ること。我が国では、延命治療を控えること(withhold)は許されても、一旦始めた延命治療を途中で止めること(withdraw)は受け入れない傾向が強いことを指摘され、今後は我が国でも治療の withdraw を認めることの必要性を力説された。突然意識消失した患者家族の介護の気持ちとして、精一杯世話したいとする念いと、疲れた、もう嫌だとする気持ちは2週間を境に交差することを紹介し、終末期医療で重要なのは、生前から希望する最善の終末期医療のあり方について、患者、家族や他の医療スタッフとオープンな話し合いの場を持つことであると力説された。ADやLiving Willの制度を整備するとともに、かかりつけ医としての医師の日常的な努力の積み重ねの重要性について論及された。

ついで、Ellen M Cosgrove 先生、高林克日己先生、山崎俊司先生を交えてパネルディスカッションに移った。Cosgrove 先生は Life prolonging と Death Delaying を明確に区別することを指摘されたが、高林克日己先生は海外旅行中に発生した疾病により脳死状態と判定され、欧米の病院で延命治療を拒否された患者が、家族の強い思いで日本に帰国後、意識を取り戻しリハビリ中である症例を紹介し、終末期医療の現場での決断が決して簡単なものでないこと、さらに医療経営的な判断が優先される傾向にある欧米の医療のあり方に警鐘を鳴らされた。山崎俊司先生は急性期病院での現状を紹介し、医師の側にパターンリズムが未だに強く残っており、延命治療についても十分な説明がなされていない現状を問題視された。

パネルディスカッションでは、日米のパネリストが繰り返し“compassionate care”の大切さに論及されたのが印象的であった。病気を治すことが究極の目的ではなく、その人なりの良い人生を送ることが大切とする考え方が基本にあるべきであろう。大変有意義な会であった。



Dr. Hedberg 白浜雅司先生 辻本好子さん 山崎俊司先生 高林克日己先生 Dr. Cosgrove 小林先生 武田先生

休憩の後、既に恒例となった David H Gremillion 先生の「一目瞭然」では、干し柿による gastric bezoars, Kabuki-makeup 症候群, Crohn 病における bamboo sign, 等々、しばし臨床医学の醍醐味を満喫した。Hedberg 先生による College Update, ついで石橋大海副支部長の司会で Business Meeting は滞りなく終了した。



Dr. David Gremillion



石橋大海先生



朔啓二郎先生



日野原重明先生

会場を隣の Room 303 に移して開催されたレセプションは、理事の朔啓二郎先生の司会、日野原重明先生の乾杯で始まったが、いつまでも若々しい日野原先生を囲みあちこちで記念写真のフラッシュがあがっていた。Hedberg 先生から、日本支部の功労者である黒川清先生、上野文昭先生、小林祥泰先生、渡辺毅先生、さらに日本支部事務局を孤軍奮闘で支えている宮本晴子さんらに記念品の贈呈があった。一方、黒川清先生からは、

今回の講演会の功労者である、Hedberg 先生、Cosgrove 先生、Gremillion 先生に感謝の品が渡され、和やかなうちに会は終了した。



Dr. Ellen Cosgrove



Dr. Hedberg

上野文昭先生



宮本

Dr. Hedberg



Dr. Gremillion

黒川清先生



井形昭弘先生



木野昌也先生

日野原先生

小林祥泰先生

ACP 支部長会議と本部ツアーに参加して

Vice President 上野文昭

年 2 回開催される ACP 支部長会議の今年度第 1 回会議は、Annual Session に先立って 2 日間にわたり ACP の Home である Philadelphia で行われ、今回も支部長代理として出席した。

初日の朝 7:00 開始の朝食 Meeting に始まり、翌日の 19 項目の議題の採否の決議で幕を閉じた。その間、本部あるいは外部の Guest による講義がぎっしりと詰まり、時差ぼけを意識する余裕もない。わが国では直接関係のない米国内の医療制度に関する話も少なくないが、Redesigning Internal Medicine Training や Evidence-based Continuing Medical Education などの講演に興味を引かれた。やはり ACP は教育を重視しているのがよくわかる。

例年のように米国外の支部長による会議も開かれた。現在 ACP の国外会員は約 5% を占めている。日本支部を含めた国外会員が ACP に加わる動機と利益について熱心な討議が続いた。ACP の一員となることを Prestige と見なすこともできよう。しかしせっかく会員となったからには、ACP を利用しない手はない。ACP の有する豊富な Educational materialこそが、米国内の医療制度などに関係のない我々を惹きつけている最大の要因ではないか、と勝手に私見を述べてきた。

Annual Session の合間を縫って Annals of Internal Medicine の Editor Dr. Sox や支部長会議議長・次期議長、医学教育担当 Vice-President など本部の面々と会合を持つこともできた。事務的な話はさておき、日本支部の会員が ACP の Educational material を活用するにはどうしたらよいのかという、熱のこもった議論が続いた。Annals や MKSAP の Japanese version も真剣に検討中である。また ACP International Update という教育講演会の日本開催プロジェクトも協議された。日本から多数の会員を受け入れてただ漫然と会費を徴収するという態度ではなく、どうしたら ACP 会員としての Benefit を享受してもらえるかということを常に考えて行動している姿勢を強く感じた。

さて、せっかく Philly に来たのなら Headquarters(本部)を見学しないわけには行かない。というわけで、渡辺理事と共に Headquarters Tour に参加した。市内中心部のアメリカ発祥の地 Old Town のすぐ傍にそびえる近代的なビルに ACP 本部があった。豪華さよりも広々とした清潔さが印象的な Office には 300 人の職員が常時勤務しているという。このような整然とした環境から数々の有益な Idea と Product が生み出されることを知り感慨深い。「ACP は何故 Society ではなく College なのか」という質問をぶつけてみた。するとそこに居合わせた次期理事会議長が、「ACP は同好の志の集まりであるだけでなく、会員に対する教育を重大な使命と考えているからである」と答えた。これで謎が解けた。ご名答に敬服した次第であった。



ACP Headquarters の正面入り口。1980 年代後半に現在の建物に移転した。市の中心部に近く、周囲は Philadelphia Old Town があるよい環境。



広大で整然とした会議室。理事会などの重要な会議はここで行われる

フィラデルフィアでのFACP授与式と晚餐会

Credentials/Membership Committee 前田賢司

今年の FACP 授与式は ACP 本部のあるフィラデルフィアのコンヴェンション・センターで4月6日(木)に行われました。今年は支部長の黒川先生のご都合がつかず、代わりに Secretary の渡辺先生が出席され、入場行進の際には日本支部の New Fellows 12 名の先頭を歩いてくださいました。会場で入場行進した New Fellows は全体で約 500 名でしたが、New Fellows の対象者総数は 2010 名で、そのうち女性は 22%、米国外の医大卒業者は 30%、海外居住者は 8%と発表されていました。35 歳以下は 100 人以上、最高齢者は 83 歳だったそうです。会場ではメイス(Mace)という儀式用の杖(職杖と訳されるそうです)が運ばれ安置されたのち聖職者による祈祷が行われ、厳かな雰囲気漂います。各賞の受賞者、新しいマスターやフェローが紹介された後、会長の C. Anderson Hedberg, MACP 先生がスピーチをされましたが、内科の将来については心配していないがと前置きされた上で、「米国の医療システムが危機に瀕している(on the brink of a crisis)」と憂慮されていたのが印象的でした。

授与式の後には隣接するマリOTT・ホテルの一室に場所を移して International Reception(海外出席者とその家族のためのレセプション)が開かれ、日本からの出席者も多数参加されました。ACP の会長を始め理事の先生方や他国の先生方、在米の日本人医師とも直接お話しすることができる良い機会でした。今年はテキサスの大学の名誉教授(血液学・腫瘍学)の Takeshi Wajima, MACP 先生ご夫妻ともお話しすることができました。

Convocation Ceremony



翌7日(金)は日本からの New Fellows と ACP からのゲストをお招きしてフィラデルフィア随一の高級フレンチ・レストラン「Le Bec-Fin」で日本支部主催の記念晩餐会が開かれました。ACP からのゲストは Steven E. Weinberger, FACP 先生(Senior Vice President), John A. Mitas II, FACP 先生(Deputy Executive Vice President), それに Mrs. Eve C. Swiacki(国際部部長)の3人でした。Weinberger 先生は教育担当ですので、今回の年次セッションのプログラムでも教育関係のパネル・ディスカッションで壇上に立っておられました。Mitas 先生は ACP 海軍支部の支部長を務められたこともある先生で、お名前からよくギリシャ系と間違えられるが本当は東欧系だとおっしゃっていました。Mrs. Swiacki は ACP の国際関係の担当なので既に皆さんにはお馴染みだと思います。晩餐会に出席された New Fellows(及び授与式に初めて出席された Fellows)は大島康雄, 小林健二, 森本剛, 門野聡, 伊藤孝史, 大木元明義, 小林有希の各先生でした。他に副支部長の上野文昭先生と Secretary の渡辺毅先生, リピーターの俵哲, 小山雄太の両先生, さらに井出広幸, 柳秀高, 香河和義と3名の会員の先生も特別参加くださり, ご家族も入れて総勢 20 名の晩餐会となりました。(授与式はご出席されたものの, ご都合で晩餐会に欠席されたのは金野真一, 金子佳賢, 久木田和夫, 貴志豊, 阿久津靖の各先生方でした。)

最後にこの場をお借りして, 渡辺先生, 上野先生, それにいつも晩餐会を手伝ってくださっている小山先生に御礼を申し上げます。2007 年サンディエゴでも多くの先生方とまたお会いできるのを楽しみにしています。

Le-Bec-Fin にて開催のACP日本支部晩餐会



事務局からの連絡事項

Associate Member/Student Member の受け入れを開始いたしました

*Associate Member

1. 2003 年以降に医学部卒業の方で現在内科の研修中であり、卒後 4 年以内に日本内科学会認定内科医取得を目標とする方に対して卒後 4 年間の入会期間を認める。
2. 1999 年以降に医学部卒業の方で現在内科の研修中であり、将来内科専門医取得を目標とされている方で日本内科学会認定内科医の資格をお持ちの方に対して卒後 8 年までの入会期間を認める。

*Student Member

医学部 3 年生～6 年生に対して卒業年度の 6 月までの入会資格を与える。

入会条件の詳細と申請書は日本支部ホームページ <http://www.icim2002.org/acp/html/index02.html> をご参照ください。

Recruit-a-Colleague キャンペーン

2006 年 3 月 2 日～2007 年 3 月 1 日の期間中にお知り合いがご入会になりますと紹介者の次年度(2007-2008 年)の本部会費が割引になります。一人ですと\$100, 二人ですと\$200, 三人ですと全額が割引になります。更に 2008 年に Washington DC で開催される Annual Session への招待券(登録、航空運賃、4 日分の宿泊費)が当る可能性があります。詳しくは本部ホームページ http://www.acponline.org/college/misc/recruit_colleague.htm?hp にアクセスしてください。尚、日本からの入会者の条件は ABIM 取得者、ABIM 受験資格者、または日本内科学会認定内科専門医であることです。入会申請書類は本部ホームページからダウンロードする事もできますし、事務局(acp@naika.or.jp)へご請求いただければ送付致します。簡単な申請書に記入していただき、事務局(日本内科学会内)に郵送していただくだけです。尚、入会申請者が紹介者のお名前を申請書に記載しなければキャンペーンの対象とはなりませんのでご注意ください。何かご不明な点がございましたら事務局(acp@naika.or.jp)までご連絡ください。皆様のご協力をお願い致します。

Internal Medicine 2007 (ACP Annual Session が名称変更となりました)

2007 年 4 月 19 日～21 日に San Diego で開催されます。7 月 29 日までに登録されますと\$499, 1 月 31 日までに登録されますと\$549, 2 月 1 日以降は\$619 となります。12 月 31 日まではキャンセル料がかかりませんので、ご参加をお考えの場合には早めのご登録をお勧めします。

登録事項変更

ご住所や Tel/Fax/E-mail のご変更は事務局(acp@naika.or.jp)までご連絡をください。直接本部にご連絡されますと、支部に変更事項が転送されてきませんのでご連絡等がうまく行かない場合があります。ACP では現住所に基づき、自動的に支部へ配属します。海外へご留学等でご住所を移される場合には支部配属希望を出す事ができます。永住でなければ海外に住所を置いたまま日本支部に所属する事も可能です。詳しくは事務局にお尋ねください。

ACP 日本支部事務局 (担当 宮本晴子)

〒113-8433

東京都文京区本郷3-28-8 (社)日本内科学会内

Tel: 03-3813-5991

Fax: 03-3818-1556

E-mail: acp@naika.or.jp

Web site: <http://www.icim2002.org/acp/html/index02.html>